

広島大学 学部・附属学校共同研究機構研究紀要
(第44号 2016.3)

図画工作・美術科の教科特性を踏まえた

21世紀型能力の学習開発

—タキソノミーテーブルの改善と実践を通して—

松崎 伸一 松本 裕子 内田 雅三 中村 和世

1. はじめに

グローバル化が進み、今後はより変化の激しい社会が子どもたちを待ち受けていると言われている。そのような中で国立教育政策研究所からも、これからの「21世紀を生き抜く力」を「21世紀型能力」とし、学校教育の中でも人との関わりの中で課題を解決し、社会自体をよりよい方向へと変化させることができる「生きる力」を有した人間を育てることの重要性が提案されている¹⁾。これを踏まえて、広島大学附属三原学校園では、社会的自立の基礎となり、「生きる力」に通ずる資質・能力を「通教科的能力」と称し、それを「キャリアプランニング能力」「人間関係形成・社会形成能力」「課題解決能力」の3つに分類し、その育成に取り組んでいる。図画工作・美術科においても教科の特性を生かし、「生きる力」に通ずる「通教科的能力」の育成をめざしている。

私たちは常に、図画工作・美術科の学習を通して、「自ら創造することを楽しむことができる子ども」、「その過程で見つけた考え方や活動・作品に新しい価値を見出すことができる子ども」、そして、「美術を通して生活や社会と主体的にかかわろうとする子ども」の育成をめざしているところである。

図画工作・美術科の学習において、子どもたちは題材のテーマのもと、「こんな感じにしたいな」「こんなものを作りたいな」という自分らしい主題を見つけ、その実現に向けて試行錯誤し、自分の方法を楽しみながら活動している。また、同時に自分や友だちの「感じ方」「考え」「表現

方法」と様々な方法で対話をしながら造形活動を進めている。このような思考や活動を通して、お互いに学び合い、その学びから新しいものを発見したり生み出したりする力を高めることができるのである。そこに、自他の違いを認め合い、お互いを尊重できる関係も生まれてくる。そしてこの体験を積み重ねていくことによって、自己肯定感や造形活動への意欲を高め、ひいては生活の中で美術にかかわっていかうとする力を育むことができると考える。それはまた、美術を出発点として新しい文化や価値を創り出す力や人とかかわりをつくる力にも通ずるもので、このような力を育むことが図画工作・美術科の教科の特性を踏まえた「生きる力」の育成であると考えられる。

そこで、図画工作・美術科では、めざす子ども像を『表現や鑑賞の活動を通して、自分や友だちの感じたことや考えたことを大切にしながら、粘り強く自ら創造することを楽しむことができる子ども』と設定し実践することで、図画工作・美術科の学習を通して21世紀を生き抜く「生きる力」を育むことができると考えた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、図画工作・美術科の教科の特性を踏まえた「生きる力」、21世紀型能力を育成する学習開発を行うことである。

研究では、本学校園でねらいとしている、通教科的な実践力（キャリアプランニング能力、人間関係形成・社会形成能力、課題対応能力）と、今まで実践研究を進めてきた本学校園図画

Shinchi Matsuzaki, Hiroko Matsumoto, Masazou Uchida, Kazuyo Nakamura : Learning Development that Nurtures Abilities for the 21st Century, Based on the Properties of Such Subjects as Manual and Fine Arts. —Through the Improvement and Practice of Taxonomy Table—

工作・美術科の評価指標であるタキノノミーター²⁾(表1)との関連性を明らかにするとともに、本年度は、これまで研究を重ねた「メタ認知」領域に合わせて、教科の本質にかかわる「認知」領域に焦点化した学習開発を進めていくこととする。

表1 図画工作・美術科のタキノノミーター

知識の次元	認知プロセス次元		
	1 思い出す/理解する	2 応用する/分析する	3 評価する/創造する/内面化する
認知領域 事実的知識 (美術用語、造形の要素と原理)	これまでの記憶から、美術用語や造形の要素と原理を想起して、新しい学習内容に関連づけている。	制作や批評・鑑賞の活動において、状況に適した美術用語を用いたり、造形の要素と原理を活用したりしている。	制作や批評・鑑賞の活動を通して、美術用語や造形の要素と原理に関する新しい認識を獲得している。
概念的知識 (題材のテーマのコンセプト)	題材のテーマのコンセプトを認識・理解している。	制作や批評・鑑賞の活動において、題材のテーマのコンセプトを同定し関連性を判断している。	題材のテーマのコンセプトをベースしながら、制作や批評・鑑賞の活動において、自分自身のコンセプトを深めている。
精神運動領域 手続的知識 (表現の技術と技法、批評・鑑賞の方法)	技法・技術を理解し習得する。批評・鑑賞の方法を理解し習得する。	習得した技法・技術を自らの制作に活用している。	習得した批評・鑑賞の方法を自らの批評・鑑賞に活用している。
感情の次元	情意プロセス次元		
	1 受容する/反応する	2 価値づけする/組織化する	3 評価する/創造する/内面化する
情意領域 興味・関心・態度	美的な現象や存在を受け入れようとし、それらに対して注意を向けたりしている。	美的な現象や存在に見出される価値を認め、その価値を自分の持つ価値や意識と関連づけて吟味している。	美的な現象や存在を自らの価値観や意識と関連づけて吟味している。
美的な価値観(美しさやよさに関する価値の意識や感情)	美的な現象や存在から、自分自身の持っている価値の意識や感情を喚起している。	美的な現象や存在を自らの価値観や意識と関連づけて吟味している。	美的な現象や存在を自らの価値観や意識と関連づけて吟味している。
メタ認知の次元	1 思い出す/理解する	2 応用する/分析する	3 評価する/創造する/内面化する
自己知識	ポートフォリオ等からこれまでの学習を思い出している。	制作や批評・鑑賞において自分が表れている点を分析している。	制作や批評・鑑賞の活動において、自分自身の価値観や意識を深めている。
自己調整		制作や批評・鑑賞において改善すべき点を見出している。	制作や批評・鑑賞の活動において、自分自身の価値観や意識を深めている。

3. 資質・能力の設定の意図

図画工作・美術科の教科の本質を次のように設定し、教科の特性を踏まえた上で、通教科的能力と関連的に育む図画工作・美術科の本質に根ざした資質・能力を次のように設定した(表2)。

表2 「教科の本質」と「通教科的能力と関連的に育む図画工作・美術科の教科の本質に根ざした資質能力」

教科の本質	美意識(造形的な活動の中で働く「美しさやよさに関する価値の意識や感情」)の育成
通教科的能力	図画工作・美術科の本質に根ざした資質・能力(キーワード・観点等)
キャリアプランニング能力	造形活動を通して、自分の生き方や社会とのかかわり方に関する考え方を創り出すことができる。(造形活動を通して、新しい可能性をイメージする力)
人間関係形成・社会形成能力	作品などの主題設定・追求を通して自分の価値意識をもたせ、異なった見方や考え方を尊重しながら、批評し合うことを通して、自分の中に新しい価値(豊かな情操)を創り出したり、他者との結びつきを深めたりすることができる。(造形活動において、自分の価値意識をもって批評し合い、新しい価値を創り出したり他者との関係を深めたりする力)
課題対応能力	主題を生み出し、自分の表現意図に合う新たな表現方法を工夫するなどして構想を練り、粘り強く創造的に表現することができる。 (表したいことをもとに思考・判断・表現する、創造的な問題解決力)

次に、それぞれの資質・能力の設定の意図について述べる。

(1) 造形活動を通して、新しい可能性をイメージする力(キャリアプランニング能力と関連)

図画工作・美術科では、キャリアプランニング能力として汎用性のある、教科の本質に根ざした資質・能力を、「造形活動を通して、自分の生き方や社会とのかかわり方に関する考

え方を創り出すことができる。(造形活動を通して、新しい可能性をイメージする力)」であるととらえた。

「表したいこと」は、入門期から幼小接続期では「自分の感じたことや想像したこと」、中間期からは「見たことや伝えたいこと」、さらに学年が上がるにつれ、自分との対話を含め、社会的な広がりや構成の美しさへと広がってくる。このような子どもたちの造形活動の特徴を踏まえ、私たちは、図画工作・美術科は「造形活動を通して自分の生き方や社会とのかかわり方に関する考え方を創り出すことができる」教科であり、その過程において「自分自身の新しい可能性をイメージする力を育むことができる」教科であるととらえた。このような資質・能力は、アートを通して自分の生き方のビジョンを育み、自分の人生を切り拓くヒントとなるものであり、集団や社会に開かれた個を確立し、「なりたい自分」になるために必要となる汎用的な力であるととらえた。

(2) 造形活動において、自分の価値意識をもって批評し合い、新しい価値を創り出したり他者との関係を深めたりする力（人間関係形成・社会形成能力と関連）

図画工作・美術科では、人間関係形成・社会形成能力として汎用性のある、教科の本質に根ざした資質・能力を、「作品などの主題設定・追求を通して自分の価値意識をもたせ、異なった見方や考え方を尊重しながら、批評し合うことを通して、自分の中に新しい価値（豊かな情操）を創り出したり、他者との結びつきを深めたりすることができる。(造形活動において、自分の価値意識を持って批評し合い、新しい価値を創り出したり他者との関係を深めたりする力)」であるととらえた。

子どもが粘り強く創造することを楽しむためには、自分は「こうしたい」「こう感じた」という考えをもつと共に、相手の主張を取り込んで、自分の考えや価値意識を広げ、更にそれを活用する力が欠かせない。このような資質・能力は、他者と協働してチームを編成したり、異なる価値を統合したり、根拠等を明確に説明したりするなど人間関係づくりに欠かせない新しい時代に求められる汎用的な資質・能力と言える。こうした資質・能力を図画工作・美術科の授業で育成するためには、表現及び鑑賞の活動を通して、自分自身や友だちとの対話の機会を

意識的に作り出すことが必要である。

(3) 表したいことをもとに思考・判断・表現する創造的な問題解決力（課題対応能力と関連）

図画工作・美術科では、課題対応能力として汎用性のある、教科の本質に根ざした資質・能力を、「主題を生み出し、自分の表現意図に合う新たな表現方法を工夫するなどして構想を練り、粘り強く創造的に表現することができる。(表したいことのもとに思考・判断・表現する、創造的な問題解決力)」であるととらえた。

図画工作・美術科における表現の学習においても、子どもの表現欲求を大切にしながら、形や色彩、材料などをもとに、より美しく創造的に、心豊かに表すための資質や能力を育成することをねらいにしている。そのためには、必ず子どもが自ら課題を決め、表したいことをもとに思考・判断し、試行錯誤しながら表現するための創造的な問題解決力が必要である。このような問題を発見し、解決に必要な情報を収集・分析・整理し、その問題を確実に解決できる資質・能力は、将来、職業生活や社会生活に汎用できる必要な能力であるととらえた。

4. 研究仮説

「メタ認知」領域に合わせて教科の本質にかかわる「認知」領域に焦点化した学習開発、実践をすることで、「生きる力」（通教科的能力）を育むことができるであろう。

5. 検証方法

- ①開発した題材の実施前後に実施する質問紙調査
- ②ポートフォリオの内容分析
- ③授業中の観察記録の内容分析
- ④具体的指標による作品の達成度の分析

6. 研究の方法

図画工作・美術科の学習指導の構成を示したタキソノミーテーブルの「認知」「精神運動」「情意」「メタ認知」の4領域（表1）と、通教科的能力の「人間関係形成・社会形成能力」「課題対応能力」「キャリアプランニング能力」の3能力（表2）の関連性を考えながら一つの表に整理した（表3）。その上で、「メタ認知」と「認知」の2領域に焦点を当てた題材と学習指導法の開発・実践を通してその有効性を検証する。

表3 「タキノミーテーブル」と「通教科的能力と関連的に育む資質・能力」との関連表

	知識の次元	認知プロセス次元			通教科的能力と関連的に育む図画工作・美術科の本質に迫る資質・能力		
		1 思い出す/理解する	2 応用する/分析する	3 評価する/創造する/内面化する	人間関係形成・社会形成能力	キャリアプランニング能力	課題対応能力
認知領域	事実的知識 (美術用語, 造形の要素と原理)	これまでの記憶から, 美術用語や造形の要素と原理を想起して, 新しい学習内容に関連づけている。	制作や批評・鑑賞の活動において, 状況に適した美術用語を用いたり, 造形の要素と原理を活用したりしている。	制作や批評・鑑賞の活動を通して, 美術用語や造形の要素と原理に関する新しい認識を獲得している。	造形活動において, 自分の価値意識をもって批評し合い, 新しい価値を創り出したり他者との関係を深めたりする力	造形活動を通して, 新しい可能性をイメージする力	表したいことをもとに思考・判断・表現する, 創造的な問題解決力
	概念的知識 (題材のテーマのコンセプト)	題材のテーマのコンセプトを認識・理解している。	制作や批評・鑑賞の活動において, 題材のテーマのコンセプトを同定し関連性を判断している。	題材のテーマのコンセプトをベースにしなが, 制作や批評・鑑賞の活動において, 自分自身のコンセプトを深めている。			
	手続的知識 (表現の技術と技法, 批評・鑑賞の方法)	技法・技術を理解し習得する。 批評・鑑賞の方法を理解し習得する。	習得した技法・技術を自らの制作に応用している。 習得した批評・鑑賞の方法を自らの批評・鑑賞に応用している。				
情意領域	感情の次元	情意プロセス次元			作品などの主題設定・追求を通して, 自分の価値意識をもたせ, 異なった見方や考え方を尊重しながら批評し合うことを通して, 自分の中に新しい価値(豊かな情操)を創り出したり, 他者との結びつきを深めたりすることができる。		
	興味・関心・態度	1 受容する/反応する	2 価値づけする/組織化する	制作や批評・鑑賞の活動を通して, 創造活動への意識や感情を再構成している。			
	美的な価値観(美しさやよさに関する価値の意識や感情)	題材のよさを受け入れようとしていたり, それらに対して注意を向けていたりしている。	題材に取り組むことでの価値を認め, その価値を自分の持っている価値の意識や感情との関連で吟味している。				
メタ認知	メタ認知の次元	1 思い出す/理解する	2 応用する/分析する	自分らしさや改善点の認識に基づいて, 自分なりの美意識を形成したり深めたりしながら, 制作や批評・鑑賞の活動に取り組んでいる。	他者と協同して活動したり, 批評し合ったりすることを通して, 作品のよさや美しさ, 自分らしさを分析し, 認識を深めることができる。	題材を通じた振り返りをする中で, 自分らしさに気づき, 造形活動による自分の新しい可能性を見つけることができる。	自己評価や他者評価により, 自分らしい工夫のよさを認めたり, 自らの学ぶ態度や技能について分析したりすることを通して, 改善点・方策を見つけて取り組むことができる。
	自己知識	ポータルフォリオ等からこれまでの学習を思い出している。	制作や批評・鑑賞において自分らしさが表れている点を分析している。				
	自己調整		制作や批評・鑑賞において改善すべき点を見出している。				

7. 研究の実際

7-1 実践事例1

(1) 題材について

○題材名 「大きなねん土のかたまりが…」

○学 年 小学校2年生(32名)

○実施期間 平成27年11月～12月

○題材の概要

本題材の骨格として共通するものは、「4人で協同し、20kgの土粘土を全部使って一つの作品を作ること」である。また、第1次、第2次それぞれ2時間ずつの時間設定で展開も共通している。相違点は、土粘土に働きかける道具と作品のテーマ設定である。

第1次は、道具は使わず「手」を使って十分に土粘土にかかわらせることとした。テーマ設定については、どのグループも「かいじゅうを作る」という共通課題で取り組んだ。理由は、9月に個人で「空想のいきもの」を土粘土で製作した経緯があり、初めてのグループでの協同製作でも9月の経験から「かいじゅう」を作る時に意見が出やすく、取り組みやすいのではないかと考えたからである。

第2次は、「掻きベラ」を使って製作することとした。第1次と同じような流れで進んでいくことで、グループで一つの作品を作るためのかわり方に見通しを持って活動ができると考えた。「掻きベラ」の面白さは、粘土をほる速さ、ほる時の気持ちよさ、ほった時にできる形にある。ここでは、その「かきベラ」の面白さを生かし新しい可能性を生み出せる活動をめざすことにした。テーマ設定は、第1次と違って、こちらから決まったものは提示せず、「ほってできた形から作りたいものを考える」こととした。

○題材の目標

土粘土の感触や特性を感じながら、手や掻きベラを使って思いついたことを表現する。

○学習計画

第1次 大きなねん土のかたまりが…① 2時間

- ・手を使ってグループで協同製作をする。
- ・作品鑑賞とふり返りをする。

第2次 大きなねん土のかたまりが…② 2時間

- ・手や掻きベラを使ってグループで協同製作をする。
- ・作品鑑賞とふり返りをする。

○本題材で育成する資質・能力とタキソノミーとの関連

通教科的能力と関連的に育む美術科の本質


に根ざした資質・能力に係る本題材における具体的な姿とタキソノミーとの関連を次のように整理した。

資質・能力	題材における具体的な姿 (関連するタキソノミー)
「新しい可能性をイメージする力」	・土粘土を素材として、自分のしてみたいことやこうだったらいいなというイメージを広げることができる。(認知領域)
「造形活動において、自分の価値意識をもって批評し合い、新しい価値を創り出したり他者との関係を深めたりする力」	・自分の感じたことを話したり、友だちの話を聞いたりしながら、協力して一つの形に表わそうとすることができる。(メタ認知) ・お互いの表し方の面白さやよさに気付くことができる。(情意領域)
「表したいことをもとに思考・判断・表現する、創造的な問題解決力」	・土粘土の特性を感じ取り、体全体の感覚や技能などを働かせながら、思いついたものを作っている。(メタ認知) ・表したいものを見つけ、表し方を考えて表現したりすることができる。(精神運動領域)

(2) 学習の実際

「手」を使ってかいじゅうをつくる(第1次)

子どもたちは大きな粘土のかたまりに期待をもってかかわり始めた。かたまりが大きいので、指ではなく掌を使って伸ばし、体全体でかかわろうとする様子が見られた。子どもたちそれぞれやってみたくてあり、個々の思いがある中で、初めはひとつの形にしていくことにやや抵抗があるように見えた。よく観察してみると、その内グループの中で中心的に活動していく子どもが現れ、その子を中心に製作が進んでいくグループが多かった。意見が通らなかつたり、お互いのやりたいことを認め合ったりしながらどのグループも一つの形にしていくことができた。ここで、あるグループの活動の一部を紹介する(図1)。



○大きな粘土を目の前にし、触りながらそれぞれ考えている。

「大きいね。」

「何を作ろうかな…。」

○一人がひもを作り始める。他もアイデアを考えている様子。

「長いひもはできたけど…」

「う～ん…」「どうする？」

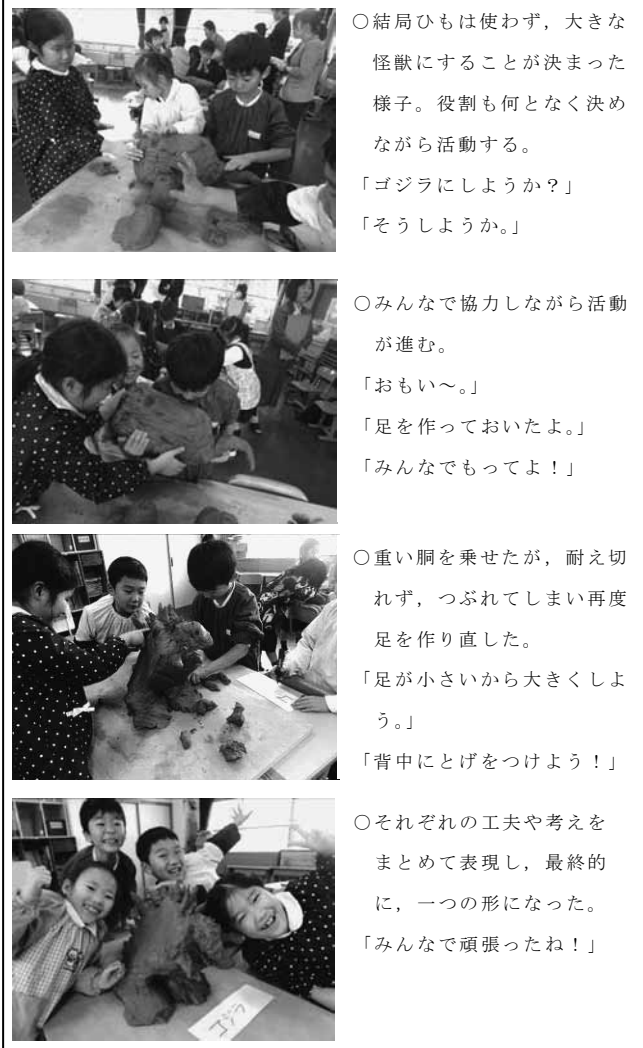


図1 あるグループの製作の流れ

○結局ひもは使わず、大きな怪獣にすることが決まった様子。役割も何となく決めながら活動する。
「ゴジラにしようか？」
「そうしようか。」

○みんなで協力しながら活動が進む。
「おおい〜。」
「足を作っておいたよ。」
「みんなでもってよ！」

○重い胴に乗せたが、耐え切れず、つぶれてしまい再度足を作り直した。
「足が小さいから大きくしよう。」
「背中にとげをつけよう！」

○それぞれの工夫や考えをまとめて表現し、最終的に、一つの形になった。
「みんなで頑張ったね！」

授業後、このグループのメンバーは次のようなふり返りをした。

グループで一つのものを作ることの「よさ」「むずかしさ」
○みんなのいけんを合体させられたこと。
○自分一人ではできないし、思いつかない時があったら、みんなで話し合えること。
▲ゴジラのは知らなかった。▲意見がばらばら。

「掻きベラ」を使って○○をつくる（第2次）

初めに掻きベラでほる様子を見せた後、子どもたちが試したり、ほってできた形を生かしたりしながら活動できるように授業を展開した。前時と似た条件でのグループ制作であったが、今回はテーマが決まっていない分、意見の調整は難しかったようで、なかなか方向が定まらないグループもあった。それでも掻きベラで生まれた形を生かせるように工夫しながら、一つの形に表現していった（図2）。



図2 ほってできた形を生かす表現

（3）成果と課題

①「造形活動を通して、新しい可能性をイメージする力」について

ループリックの評価規準を「土粘土を素材として、自分のしてみたいことやこうだったらいいなというイメージを広げることができる」とした。

大きな粘土から、考えられる活動のイメージを広げていくことに関しては、グループの中に中心的な子どもがいて、その子どもから考えや活動が波及していくという感じであった。はじめから自分でイメージを広げて活動できる子どもは十分ではなかったが、友だちの発言や活動から触発され、大胆に大きな粘土に積極的にかかわって形を生み出そうとする姿は多く見られた。事後調査では、「作りたいものを、自分で思いついてためした」は評価が下がったが、「作りたいものを、友だちとの交流から思いついてためした」は評価が上がった。グループでの活動が友だちからヒントを見つけ、自分の活動に生かそうとしたことがうかがえる。課題としては、グループでの活動になり、個々の姿が現れにくいということである。どのように個々を見ていくか、評価するかということにおいてグループ活動での評価の難しさを感じた。

②「造形活動において、自分の価値意識をもって批評し合い、新しい価値を創り出したり他者との関係を深めたりする力」について

ルーブリックの評価規準を「自分の感じたことを話したり、友だちの話を聞いたりしながら一つの形に表そうとしている」とした。第1次の「手を使ってかいじゅうをつくる」活動でのふり返りでも紹介したように、グループ製作に「むずかしさ」を感じたようだが、「よさ」も多く感じていた。事後調査では、「作品をみるとき、友だちの考えを大切にしながら話し合うことができた」の項目は、「あてはまる」と回答した子どもが25名で、事前調査の20名に比べ5名増加しており、互いに尊重しながら活動することの大切さを感じていることが伺える。

第2次ではテーマを設定しなかったため、4人のめざす方向性を一つに決めるのに時間がかかったことが課題としてあげられる。

③「表したいことをもとに思考・判断・表現する創造的な問題解決力」について

ルーブリックの評価規準を「土粘土の特性を感じ取り、体全体の感覚や技能などを働かせながら思いついたものを作ったり、表したいものを見つけ、表し方を考えて表現したりすることができる」とした。第2次では、搔きベラを使って感じたことや、かきベラを使ってできた形や模様を生かして表現したいもの考えた。ふり返りには次のように記されていた。

○「かきベラ」をつかって新しくかんじたこと

- ・どうぶつだったら耳などを作るのに、それからスタンプでやったりできてかきベラをつかっていいと思いました。
- ・かきベラでけずって、けずったものもつかえるので楽しかったです。
- ・かきベラはいろんな形を作れることをかんじました。
- ・かきベラでやると、手でやるよりやりやすいとかんじた。
- ・かきベラをつかうと、手でできないひょうげんができることを、新しくかんじました。
- ・かきベラでもあながあいたので、すごかったです。

搔きベラという道具を活用して、そのよさや特徴を生かしながら製作する様子や、ふり返りから工夫したことや感じたことが見て取れた。

課題としては、準備した土粘土の軟らかさである。今回は少し軟らかかったので、奥のほうまでほると、ねらった効果が出にくく、搔きベラのよさが十分に生かすことができなかつた面もあった。

7-2 実践事例2

(1) 題材について

- 題材名 「学芸員になって～美しさの交流～」
- 学 年 7年生（中学校1年生）（41名）
- 実施期間 平成27年11月～12月
- 題材の概要

本題材は、学芸員となってレイアウトや解説を工夫して鑑賞パネルを作成し企画展を開催する。この活動を通して、他者と交流することにより、美術作品の持つよさや美しさ（主題及び造形的な要素）に気付き、それを伝え合うことで、対象を深く鑑賞する能力を高めていくものである。

○題材の目標

学芸員の仕事を通して美術と生活との関係を考え、実際に自分たちがテーマを決めて絵画（カード）を展示し、鑑賞者から感想を聞くことにより気付いたよさや美しさを伝え合うことで、対象を深く鑑賞する能力を高めるようにする。

○学習計画

- 第1次 学芸員の仕事を知り展覧会の展望を持つ。・・・・・・・・・・・・・・・・・・1時間
- 第2次 展覧会の準備をする。・・・・・・3時間
- 第3次 展覧会を実施した感想をもとに意見を交流する。・・・・・・・・・・1時間

○本題材で育成する資質・能力とタキソノミーとの関連

通教科的能力と関連的に育む美術科の本質に根ざした資質・能力に係る本題材における具体的な姿とタキソノミーとの関連を次のように整理した。

資質・能力	題材における具体的な姿 (関連するタキソノミー)
「新しい可能性をイメージする力」	<ul style="list-style-type: none"> ・美術館や美術展のよさに気付く。(認知領域) ・造形活動を通して、他者へ働きかけたいことを発想できる。(認知領域) ・美術を通して発信することは、自分にとってどんな意義があるのかを捉えることができる。(メタ認知)
「造形活動において、自分の価値意識をもって批評し合い、新しい価値を創り出したり他者との関係を深めたりする力」	<ul style="list-style-type: none"> ・テーマやカードの選定における自他の判断やその根拠を伝え合い、共通点や相違点を見出しながら、見方や考え方を広げることができる。(情意領域) ・ミニ美術展に向けて友達と話し合ったり、学芸員から話を聞いたり、アンケートを見たりして、美術展示のよさや美しさ、わかりやすさを捉えることができる。(メタ認知)。
「表したいことをもとに思考・判断・表現する、創造的な問題解決力」	<ul style="list-style-type: none"> ・鑑賞者が自分たちの意図に沿った見方や気づきができるよう、工夫して展示パネルの構想を練り、粘り強く制作できる。(精神運動領域) ・何をどのようにすれば、ねらいに沿った展示になるのかを他者との話し合いで明らかにし、見直しをもって取

り組み、成果や課題を振り返ることができる。(メタ認知)

(2) 学習の実際

学芸員さんとの出会い

題材の導入において、広島県立美術館学芸員の方と次の事項について事前に連携し、美術館の役割等について講義をして頂いた。

<事前の連携事項>

- 講義内容
 - ・美術館の役割
 - ・学芸員の仕事、やりがい
 - ・企画展の魅力
 - ・中学生に期待すること他
- 生徒による質問事項
 - ・学芸員の仕事のやりがい等にかかわること
 - ・具体的な仕事内容にかかわること
 - ・県立美術館の特色にかかわること
- 予想される生徒のテーマ

テーマ設定、アートカードの選択

テーマを設定し、対象が幼稚園児や小学生であることを踏まえ、個人や、グループで交流し、検討しアートカードを選択した(図3)。アートカードは「広島県立美術館 1セット³⁾ 56枚、国立美術館他4館 1セット⁴⁾ 65枚、Art Image Mini-Kit 4セット⁵⁾ 120枚」を使用した。



図3 アートカードを選択する様子

展示ボードの作成と協議

展示用ボードにレイアウトを工夫してカードや解説を貼っていった。学芸員の方に教えていただいた工夫を活用した。完成前には、クラスで鑑賞会をし、良い点や改善点を伝え合うようにした。

国語科と連携したギャラリートーク(図4)

4年生に向けてのギャラリートークの内容を向上させるため、国語の授業において、プレゼンテーションの基礎を抑え、本番に臨んだ。



図4 ギャラリートークの様子

幼稚園・小学生の来場の様子

展示期間中の幼稚園児や児童の鑑賞の様子(図5)を、写真やビデオで7年生に伝え、アンケートを全員に回覧して読ませた。



図5 鑑賞の様子

国語科との連携による振り返り

活動を振り返って、「楽しかったこと・よかったこと・新たに分かったこと、ついた力、再挑戦したいことと具体的場面、学芸員さんへのお礼」の4点を記述した。

(3) 成果と課題

①「新しい可能性をイメージする力」について

パフォーマンス課題「事後の振り返りにおいて、今後挑戦したいことを記述する活動」を設定し評価したところ、A「目標の実現方法が明確である生徒」は28人、B「造形活動を通して、友達や社会・地域へ働きかけたいこと・交流したいことなどの目標を発想できる生徒」は0人、C「次の目標が書けない生徒」は13人であった。Cのうち、12人は、目標は書いていたが、造形的な活動以外であったためCと判断した。「次回は、同級生に自分が選んだ絵についての説明を聞いてもらいたいです。」「絵についてもっと知ってもっと詳しく教えることができるようにしていきたいです。」「次は、文化祭などで行き、親や先生など、もっと多くの人にギャラリートークを聞いてもらいたいです。」等の記述から、美術を通じたコミュニケーションへの意欲が伺えた。また、美術館への理解に関する記述からは、事後に美術館の工夫や苦勞、美術館に対する自分の考えを追加して記述した生徒が27人いた。

②「造形活動において、自分の価値意識をもって批評し合い、新しい価値を創り出したり他者との関係を深めたりする力」について

事前事後質問紙調査「自分の考えをもち、友だちの考えを尊重しながら話し合うことができる」では事後が83%(7%減)となった。「次は、もっと自分のアイデアを出して、積極的にかかわりたい」「相手に話をさせる会話の仕方を身に付けたい」等の感想から、作品の知識や意見を調整して折り合いをつけながら進めることに課題があるととらえるようになった生徒がいたと考える。

パフォーマンス課題「テーマやカードの選定」では、展示に適したテーマやカードについて交

流する様子を見とりをした。司会を決めて全員が意見を述べ合ったり、協力して制作に取り組んだりする様子が見られた。また、「私たちは、絵や写真を選んだ後にテーマを決めたので、ネーミングをする力が付きました。バラバラな絵や写真なので、その中から1つのテーマに絞るということが難しかったです。サブテーマを決めるときには、一番何を見てほしいかを考えてつけました。」等の振り返りが書けており、全員がB規準を達成できたと判断した。A評価については、観察により、「小さい子がお母さんに甘えているような様子から、親子の愛が感じられる。」等の一部の特徴的な発言は把握できたが、全体の把握はできていない。

パフォーマンス課題「展示パネルの批評」では、自分たちの班とペア班の完成間近の展示パネルについて、3段階で評価し、その理由を記入して伝え合う活動を評価した。生徒の評価シートを教師が評価した結果、自分の班に対しては、「A造形要素を根拠に批評できる」：57.1%、「B理由をつけて批評できる」：31.4%、「C批評と理由が書けない」：11.4%であり、ペア班に対する評価は、A：77.1%、B：11.4%、C：11.4%であった。自分の班よりも、ペア班に対しての評価カードの方が、教師のA評価が20%高かった。これは、相手に対して、客観的で具体的な視点をもって伝え合い、改善し合おうという姿勢からではないかと考える。

③「表したいことをもとに思考・判断・表現する、創造的な問題解決力」について

事前事後質問紙調査では、「美術で新たに挑戦してみたいことがある。」の肯定的回答が、93%（5%増）となった。振り返りの記述から、取り組みの成果や課題を踏まえて再チャレンジしたいと考えたからだにとらえている。

パフォーマンス課題「展示パネルの制作」では、班で役割分担して取り組んだため、「C取り組めない」と判断される生徒は見られなかった。活動の見とりが十分でなく、Aと判断される生徒の人数の特定はできていない。Aと判断される生徒の特徴的な姿としては、「学芸員の方に教えていただいたカードの配置の間隔や、目立たせる工夫を応用して制作した。見る人の視点で、動線を考え、矢印などで順番を示した。低学年の児童が興味を持つように、テーマに関連したイラストを添付した。テーマに沿って制作しながら、話し合っ

てイメージを広げ、展示ボード全体を粘り強く装飾した。解説文の中に、造形的な要素や主題に気付かせるような問いかけ（クイズ等）を用いた。」が挙げられる。

一方、展示ボードの空欄の改善を図ろうとしない、カードのレイアウトに統一感がない、カードがはがれかけているのを修正しない等の班もあり、もう一段階の意識づけが必要であったかととらえている。

パフォーマンス課題「ギャラリートーク」については、Cと判断される生徒はいなかった。国語の時間に話し方やアピールの仕方を学習し、全員で役割を分担して、4年生に対するギャラリートークに臨むことができたことの成果である。活動の見とりが十分でなく、Aと判断される生徒の人数の特定はできていない。特徴的な姿として、ジェスチャーを交えたり、クイズ形式で問いかけたりし、興味を持って聞かせる工夫をしたり、役割を明確にし、リレー形式で最後まで計画的に説明をすることができていたり、注目させたい作品を指さし、造形的な要素に着目させて、理解を図ろうとする姿等が挙げられる。

しかし、異年齢の鑑賞者に話しかけることに積極的になれず、いつの間にかアクティブに楽しく語る生徒に任せてしまい、パネルの脇や後ろに引っ込んでしまう生徒もいた。また、楽しくしようという気持ちから、作品について、適当な説明をしてしまう生徒もいた。また、事後の振り返りの記述内容に、「私たちの展示は少しさみしい感じになっていたから、配置などをもう少しみんなと話し合っ

④「よさや美しさ」についての意識の変化

事前事後調査「自分にとっての『よさや美しさ』のイメージをイメージマップで表す」の記述内容を分類すると、事後に、感情や感覚（いやし、笑顔、こめられた思い、幻想的など）、自然（春夏秋冬など）、美術的な要素（色合い、バランス、背景など）の追加が複数見られたのが特徴である。

また、事前事後調査「普段の生活や学校生活などでどんな時によさや美しさを感じますか」に関する記述内容を分類すると、事前事後の総計は多い順に、自然：60、趣味・行為：21、美術：18、人工物：11、スポーツ：10、人間関係：6、音楽：3、生命：3、文芸：2で、そのうち事後の記述の追加は、自然が6増加した以外は0～2の増加であった。事後に、「自分がしたことで人が笑顔になるのを見たとき」等を挙げ、別の振り返りに、「ギャラリートークをして、お互いのコミュニケーションが取れるから、美術はコミュニケーションとも関係があるのかなと思った。」「今まで、絵をみる機会があまりなかったので、たくさんの絵を見て、絵を真剣に選べてとても楽しかった。」「僕は絵の美しさを見極める力が付いた。絵が美しいかどうかはその人の価値観によって違うが、ぼくの価値観なりに絵を選ぶことができたから。また、絵を選んでみたい。」などの記述も見られた。

生徒は一人ひとり違った、様々なよさや美しさをイメージしながら、題材に臨んでいることが分かる。

8. 成果と課題

小学校では、昨年度に引き続いて土粘土を素材とした題材の系統性について考え、実践することができた。1年生時の土粘土との出会いから、だんだん土粘土に慣れ、土粘土の性質を理解したり、表現するための操作を経験したりして、課題を解決するためのスキルを身につけることができた。特に低学年で土粘土を扱うことが進められている中で、実践し、体全体を使いながらイメージを広げ、自由に表現しようとする意欲を育てることができたことは大きな成果と考える。また、今回の題材では、グループ製作を取り入れることで、コミュニケーション能力の向上を図ることをねらった。題材を通して子どもたちは、話し合いながら協同で活動することの良さや難しさを感じることができ、他者とのかわり方について考え、他の活動時でも生かせる経験ができたと考える。しかし反面、グループで一つのを製作することで、個人の思いが反映されにくいという課題も見えてきた。今後は、図画工作科という表現を主とする教科の中で、個とグループの思いのバランスも考えながら指導していきたい。

中学校では、美術館と連携したことにより、

来館者への気配り、美術作品の扱い等日頃接することのない美術館の裏側について専門的な知識を学芸員の方から教えていただき、生徒は大変興味を持つことができていた。また、国語科と連携して、プレゼンテーションの基礎を復習したため、生徒は、具体的な視点をもってギャラリートークに臨むことができた。また、事後において、幼稚園児や小学生の様子や感想を捉え、自分たちの活動を客観的に振り返ることができていた。また、一部課題が残ったが、生徒の記述や教師の見とりからは、目標とした資質・能力が育った様子がおおむね見とれた。今後は、パフォーマンス課題とその見とりの方法を精選してより具体化し、多忙な授業の中でも、ポイントを絞って生徒の状況を見とれるようにしていきたい。

9. おわりに

今年度は、21世紀型能力を図画工作・美術科の教科特性の力に置き換え題材開発・実践に取り組んだ。また、タキソノミーテーブルと資質・能力の関連性も整理することができた。今後も21世紀型能力の育成が重要視されると考えられるが、図画工作・美術科で育むことのできる「生きる力」をさらに追究していきたい。

なお、本研究を進めるにあたり、ご指導、ご協力を頂いた広島県立美術館の福田浩子学芸員に感謝致します。

引用（参考）文献

- 1) 国立教育政策研究所, 2013, 「社会の変化に対応する資質や能力を育成する教育課程編成の基本原則」, p. 6
- 2) 中村和世・大和浩子・中島敦夫・吉川和生, 2010, 「図画工作・美術科における『ブルームのタキソノミー改訂版』の活用に関する考察」, 『学校教育実践学』, 第 17 巻, pp. 71-80
- 3) 広島県立美術館 鑑賞教材・アートカード (<http://www.hpam.jp/education/>)
- 4) 国立美術館アートカードセット：東京国立近代美術館他
- 5) Art Image Mini-Kit : David W. Baker による "Small reproductions Big idea" , ©1990 Art Image Publications, Ink.